様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３４３０３
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１９６２７

研究課題名（和文）障害者スポーツを取り入れた体育授業のモデル構築および教育効果の検証

研究課題名（英文）Construction of a model for physical education classes incorporating adapted sports and verification of its educational effects

研究代表者
濱中　良（HAMANAKA, RYO）

京都先端科学大学・健康医療学部・講師

研究者番号：７０８４６５５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，アダプテッド・スポーツ（障害者スポーツも含む）の体験プログラムを実践的に研究することで，体験プログラムの効果や妥当性について検討した．なお，当該プログラムで期待される体験効果として，以下の3つを示した．①アダプテッド・スポーツの理解②新たな身体知への気づき③スポーツ場面における障害観の変化
その結果を踏まえて最終的に，①アダプテッド・スポーツの理解をねらいとしたボッチャ体験90分1回，②新たな身体知への気づきをねらいとしたゴールボール90分3回の体験プログラム，および③スポーツ場面における障害観の変化を狙いとした講義90分1回のプログラムを提案することができた．

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、体育授業等でアダプテッド・スポーツ（障害者スポーツも含む）の体験する意義や教育効果について示すことができた．また、本研究の成果として提案した90分5回のプログラムは、①アダプテッド・スポーツの理解②新たな身体知への気づき③スポーツ場面における障害観の変化の効果に期待ができる．
これまで現場ではアダプテッド・スポーツは手探りで実践されており、中には安易な障害体験に留まり、望ましくない障害観の形成に繋がることも危惧されていた．本研究では、視覚を制限するスポーツに関しては複数回の実践が必要となること等の留意事項もを示すことができた．本研究は今後の共生社会実現に寄与できる研究といえるだろう．

研究成果の概要（英文）：This study examined the effectiveness and validity of an experience program for adapted sports (including sports for the disabled) through a practical study. The following three effects were expected from the experience program. (1) Understanding of adapted sports, (2) Awareness of new physical knowledge, and (3) Change in view of disability.
As a result, we proposed the following three programs: (1) one 90-minute boccia experience aimed at understanding adapted sports, (2) three 90-minute goalball experiences aimed at gaining new physical knowledge, and (3) one 90-minute lecture.

研究分野：アダプテッド・スポーツ科学

キーワード：アダプテッド・スポーツ　障害者スポーツ　教養　リベラルアーツ　体育　身体知

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

これまでに障害者スポーツの体験についての研究が進められており，小中学生を対象とした障害者スポーツの体験が障害や障害者スポーツに対する意識の変化に有効（安井，2004；内田・大谷，2013；佐藤ら，2015）であることが示されている．また，佐藤ら（2015）は，障害者スポーツを体験する場として「学校体育」に注目し，一般小中学校の体育において障害者スポーツを含んだ教育を実践した研究を報告している．しかしながら，障害者スポーツを学校体育で実施するにあたり，以下の課題を抱えている．

１）学習指導要領等の授業の参考になる指針や資料が少ない

これまで学校体育において障害者スポーツに取り組んだ実践報告や研究は少なく，学習指導要領にも障害者スポーツについての詳細は記載されていない．また，安易に障害者スポーツを体験するだけでは，障害観を歪める可能性が懸念される．

２）学校体育にて障害者スポーツを実施する有用性や教育効果について検証されていない

これまで障害者スポーツの体験が障害や障害者スポーツに対する意識の変化に有効であることは示されているものの，それ以外の教育効果や有用性について検証されていない．体育授業で実施する意義も含めて教育効果について検証することは課題である．

２．研究の目的

高等教育機関における教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムの提案を目的とした．また，当該プログラムで目指す学習課題は，先行知見におけるアダプテッド・スポーツの意義や期待される体験効果を鑑み，以下の 3 つとする．

① アダプテッド・スポーツの理解
② 新たな身体知への気づき
③ 障害観の変化

また，本研究で開発したプログラムがこれらの学習課題をどの程度達成できるかについて研究課題を設定し明らかにする．そして，最終的に本研究における研究成果を手がかりに，高等教育機関における教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムを提案する．具体的には，活動する種目，時間および回数，体験内容について提案することを目指す．

３．研究の方法

(1)アダプテッド・スポーツの理解を目的としたボッチャプログラムの開発

対象は，2020 年度に T 県 A 高専に在籍する 2 年生 5 クラス 209 名（男性 158 名，女性 51 名）とした．授業は，ボッチャを教材として 1 回 90 分間を実践した．授業実践者は，高専での教員経験が 2 年であり，対象のクラス全ての授業を担当していた．また，授業実践者は，普段から授業終了後に学習者の様子や授業を実践した所感をノートに記していた．本授業においては，これまでの授業との違いを探すことを視点として観察することとした．

調査は，授業前後に Microsoft 社のアンケート機能 forms を用いて行った．調査期間は，2020 年 11 月 18 日から 11 月 24 日とした．なお，学習者に対して，アンケート結果は教育改善を図る目的のみ使用すること，成績の評価には反映しないこと，そして，数値データをまとめる際には個人情報を除いたうえで統計的処理をかけることを説明し了承を得た．

(2) 新たな身体知への気づきを目的としたゴールボールプログラムの開発

A 高専に在籍する 17–18 歳の生徒 248 名（男子 157 名，女子 91 名）を対象とした．単元目標は「ゴールボールを楽しくプレーできることを目指し，その過程において新たな身体知に気づくことができる」こととした．授業内容は，90 分 3 回の実技と 30 分 1 回の講義の内容を立案した．なお，本研究においては 3 回の実技中はアダプテッド・スポーツについての詳細な説明は行わず 1 つのスポーツとして紹介して実践した．また，講義は 3 回の実技終了後から 2 週間以降に実施し，30 分程度ゴールボールのルールの復習，アダプテッド・スポーツの概要，そして障害の捉え方（医療モデル・社会モデルの違い）についての内容を扱った．アンケートは運動技能感の変化，新たな身体知の気づき，そして障害観の変化を検討できるように立案し調査を実施した．

４．研究成果

(1) 90 分 1 回のボッチャの実践から①アダプテッド・スポーツの理解への体験効果を確認した．その結果，ボッチャ体験を通じて，道具やルールが工夫されることにより「誰もがスポーツを楽しめること」および「誰とでも楽しむことができること」の理解，すなわち，アダプテッド・スポーツの理解への効果があったことが確認された．さらには，アダプテッド・スポーツの理解にボッチャが適しているという仮説は正しいことが示唆された．

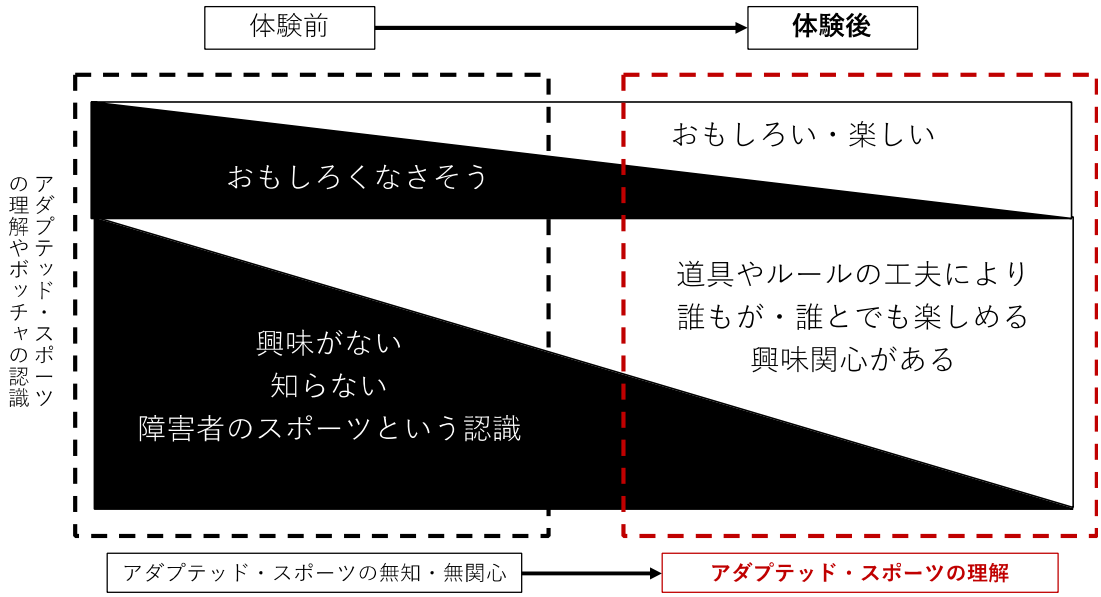

図 1　アダプテッド・スポーツの理解をねらいにしたボッチャ体験プログラムの学習概要

(2) 90 分複数回のゴールボールの実践から②新たな身体知への気づきへの効果，ならびに③障害観の変化への波及効果について検討した．その結果，複数回のゴールボールの体験により，新たな身体知に気づくことが確認された．さらに，実技後に講義を行うことにより，障害観の変化に望ましい変化に期待できることが示唆された．一方，90 分 1 回で終えるプログラムは，対象者に怖いやできないといった否定的な印象を持たせる可能性が示唆された．

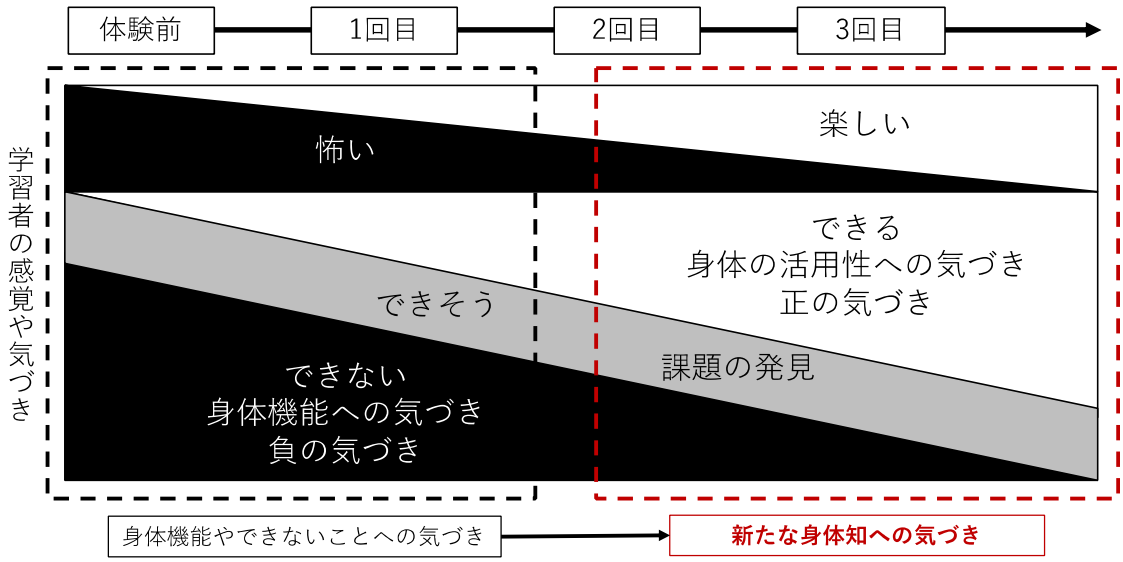

図 2　新たな身体知に気づくことをねらいにしたゴールボール体験プログラムの学習概要

複数の研究成果を参考に，高等教育機関における教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムを検討した．その結果，ボッチャは①アダプテッド・スポーツの理解をねらいとして 90 分 1 回の体験プログラム，ゴールボールは②新たな身体知への気づきをねらいとして 90 分 3 回の体験プログラムの構築を行なった．なお，③障害観の変化については，本プログラムのみでは，実施したボッチャやゴールボールへの好感的な意識変化，障害者と一緒にスポーツすることは「危なくない」「難しくない」，「工夫次第で障害は克服できる」，そしてアダプテッド・スポーツへの意識効果には期待ができる．すなわち，スポーツ場面における障害観の望ましい変化については効果が期待できることが示唆された．一方，障害理解教育としては，本プログラムのみでは効果は限定的であり，障害に関する知識を習得する機会および障害者と関わる機会を設けた他のプログラムと併用する必要がある．

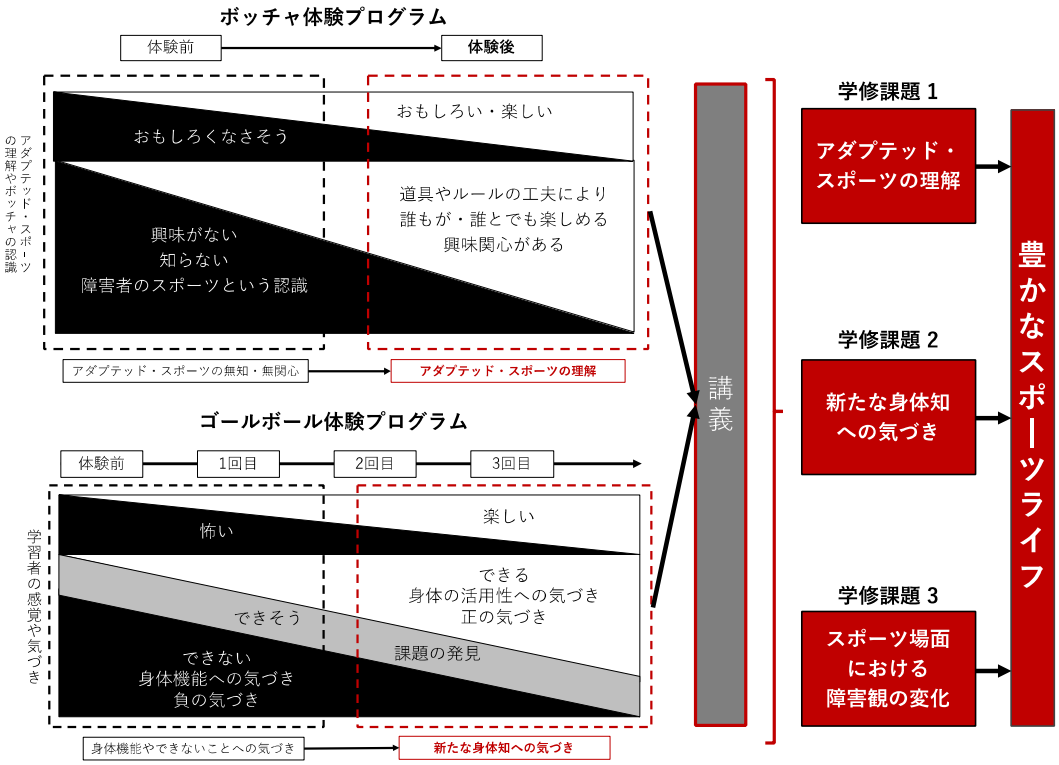

図 3　提案する教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムの学習概要

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 濱中 良，宇野 直士，柴山 慧	４．巻 20
２．論文標題 ボッチャ体験によるアダプテッド・スポーツの意識変化 ：高専生を対象とした授業の報告	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アダプテッド・スポーツ科学	６．最初と最後の頁 101-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 濱中 良，大野 政人	４．巻 38
２．論文標題 ボッチャを取り入れた体育授業の身体活動量および運動強度： 18-19歳を対象とした高専4年生の体育授業実践から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 山陰体育学研究	６．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 濱中 良，宇野 直士	４．巻 7
２．論文標題 16-20 歳を対象としたアダプテッド・スポーツの経験，興味・関心，知識に関する調査研究	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アダプテッド体育・スポーツ学研究	６．最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 濱中 良，宇野 直士，柴山 慧，飯干 明，金高 宏文，森 司朗，井福 裕俊	４．巻 61
２．論文標題 ゴールボールを取り入れた体育授業の検討（第 2 報） ：複数回の授業実践から得られた有効性と課題点	５．発行年 2023年
３．雑誌名 鹿屋体育大学 学術研究紀要	６．最初と最後の頁 31-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 濱中 良，飯干 明，金高 宏文，森 司朗，井福 裕俊	４．巻 38(2)
２．論文標題 ゴールボールを取り入れた体育授業の検討（第３報）：新たな身体知への気づき・運動技能感・障害観の変化	５．発行年 2023年
３．雑誌名 九州体育・スポーツ学研究	６．最初と最後の頁 21-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Ryo Hamanaka, Tadashi Uno, Masaki Minami, Masato Ohno, Fernando Hiroshi Ichiya
２．発表標題 Changes in exercise frequency and time during face-to-face lessons, school holidays, and online lessons: Online questionnaire survey for students aged 16-17 years
３．学会等名 European College of Sport Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 濱中 良，飯干 明，金高 宏文，森 司朗，井福 裕俊
２．発表標題 高等専門学校におけるゴールボールを取り入れた体育授業プログラムの検討 ：新たな身体知への気づきと障害観の変化
３．学会等名 第73回 日本体育・スポーツ・健康学会 学校保健体育研究部会【課題B】口頭発表④
４．発表年 2023年

１．発表者名 濱中良
２．発表標題 ゴールボール初心者のためのスローイング技能の向上を目指す教材の作成
３．学会等名 第31回 視覚障害リハビリテーション研究発表大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関